332
628

約本

歌集

白珠

第二輯

平安倶樂部短歌會

昭和十一年版

始

特230
714

短歌總數五百二十一首

昭和十一年版

目次

冬ひでり……鹽津眞二……一
泥雪……清水代助……二
參禪行……尾田茂彦……一七
こぼれ米……古川貞二郎……二三
肉を喰ふ菌……稻山熙一……三一
行路……山野茂友……三七
風來帖……小島空念……四三
『遑あと』以後……山中刀葉……四九

神童子峠……土岐朝裕……五七
PRÄLUDIEN風に……糟谷敏英……六三
偶像……井上正子……七一
白光……田村六郎……七九
灰皿……高阪盛太郎……八七
轢音……和田周三……九七
冬青集……河村千秋……一〇七
卷末小記……河村千秋

冬ひでり

鹽津眞二

歌を始めてからもう五六年以上になるが、歌がどれだけ上手になつたかは頗る怪しい。併し作歌によつて得た功德といふものがありとすれば一つ二つはある。一つには自然に對しより注意深くなつたことだ。かりそめの逍遙にも、慌しい旅行にも何かしら探索しようといふ意圖を覺えるやうになつた。それも單に詩囊を肥やさうといふこと以上に。少くとも生來愚鈍な眼を、漫然たる態度をいさゝかにても矯めて吳れたことは有難いことに思つてゐる。自然に親しむことはやがて歷史に近づく機緣ともなつた。も一つは孤獨の好伴侶となつたことである。自然に親しむこと自身がすでに孤獨に於て最も深いものがあるのであるが、かゝる遁世的な意味の孤獨はしばらくおいて、煩はしい人生の職場の片隅に設けられたささやかな休息所として、——しかしそれも譬へて見れば浪多き航海に一ときキャビンに逃げ込むとしても船そのものゝ動搖は所詮免れがたいのであるが——、かうした休息所として、歌は私に恰好のもののやうに思はれるのである。それは極めてささやかな安息所、誰に勸められて入つたといふでもないが、今は住めば都の感じで、いひしれぬ執着を感じ初めてゐる。その意味に於て歌の上手下手は第二、第三の問題でもある。

冬ひでり

冬旱(ひでり)魃植ゑて日もなき庭樹々に水はやりつつ心もとなし

つむじ風狂ふ十字路よぎるとて著(し)るき埃にまみれけるかも

牛糞も塵としなりて舞ひてゐむ寒土を捲きておこる旋(つむじ)風に

流し水凍れる上に南天の落葉さながら凝りてひさしき

夕寒き裸(ら)木(ぼく)の列のいやはてに白堊洋館おぼめきて立て

わが勤め暖(ぬく)き役所に一日ゐて心ゆるびのなしとせぬなり

南天と葉牡丹に添へて活けしかば花の水仙まづしをれけり

東京

雜司ヶ谷の墓地にわが向ふつつましく雨にうるほへる林道をすぎ

護國寺の前を素通り雨ながら上野の春を見むと急ぎぬ

舊き友われをもてなすこの席に汽笛ひびかふ海近からむ

雨風となりし銀座を歩きつつ土産の品をおもひ忘れず

築地河岸夜のさびれを戻り來て旅のつれなさかこちけるかも

吉野

内陣は夕べかそけし頭(づ)の上に梁の軋めく音をききつつ

一夜寢むこの間(ま)に展べし屏風にぞ咲きのゆたけき櫻描ける

掌に撫でて賞づる柱のひとところ金箔剝げて見のあらはなる

つづら折諸枝をかはす葉櫻のもとゆくときぞ雨はしたしき

葉櫻の木の間に殘る雪洞の雨に濡れつつ行く人もなし

修驗行者しづかに過ぎぬ如意輪の寺門をのぞむ石段(きざはし)のもと

山陵の道べかそかに咲く花のつつじもやがて雨にぬれはつ

精進料理したたか食べてさていかに過ぐさむものか山坊の宵(よ)を

碁將棋に耽りし輩寢をさめて咋夜(よべ)の嵐を覺えずといへり

家づとに賜びしぞわれも持ち歸る山の靈藥陀羅尼助丸

久米寺

寺屋根の向ふ木高き樟の若葉まともに西陽射しつつ
あはれこの寺の尼僧が掌を觸れて人の眼いやす術を見にけり

冷房

わが引くや扉を目がけ噴きよする眞冬ながらの風のつめたさ
不自然かあらぬか吾はただ知れり汗は郤き現身は蘇く
觸るるもの凡そ冷やけくいま更に冷たきを飲まむ欲の薄らぐ

ひねもすをかくて働ける少女らは又他の不平を喞ちゐるべし
冷房の地下より出でて胸わろくただ眞直ぐにぞ歸りゆくべき

龍安寺

門までは來し覺えあれその裡にかく廣々しき池のありとは
池尻にわたす橋さへ隱るがに水の面蔽へる菱のしげり葉
海なかの島なす岩やめぐりゐる砂の箒目を渦卷と見む
一樹なき庭にちらばふ石組のかさ低にして射す光あまねし
緣鼻に佇ちて眼づたふ石庭の築地なだらかに傾きて見ゆ

塀の外に繁み立つ樹群寂かなりその淡き蔭庭に及べり
濕臭き疊の上にあぐまひて砂白々しき庭に見とれぬ
屋根低き築地のかげに苔草のたもてる緑よしとわが見つ
見どころは唯この石組にありといふあからさまなる布置のよろしさ
すね者の背向けあへる意にやむきむきにある岩の居すまひ
午告ぐる吹笛とほし山寺に時を過しつ腹へりにけり

西芳寺

薄曇り風もそよがぬこの林泉のふかきしじまや啼く鳥もるぬ

くねくねと幹のねぢけし樹ぞ多き茶亭のあたりふかく戻りて
苔生よりつと匍ひ出でし大き蟻わが登音におぢてかくれぬ
楓の茂葉がくれにむれし蚊か人のけはひにすなはち襲ひ來
池島の頂きおほに苔むせりその色さやか水にしづきて
薄照りの日光けうとく目交ひをとべりし蜻蛉高き木ぬれに
雨もよひ暑さもあつし前庭の苔生のいきれまぎれあらずも
暮近くひと群れの童子聲あげてこの苑ふかく入りゆけるかも
廣告氣球風を孕めばひずみつつその襞光れつばらつばらに

廣告氣球けふは露臺に憩ひあり圓き頂の搖れつつを見ゆ

泥雪

清水代助

近來自分はいたく疲れを覺えて居る。

去年の夏から自分の生活には、公私共に可成りの轉變が起つた。その餘波は一年後の今もなほ砂濱に吹き寄せる大洋のうねりの樣に我が足許を洗つて居る。

短歌は生活の記錄であるとの信條に動搖を來たしたのもこの頃からである。譬へそれが悲運の連續であつたとは云へ、見方によつては、歌にすべき事件、感懷は山とあつたのであるが、一として短歌にしあげ得ず、第一歌ふ氣分が少しも湧いて來ないのだから始末に困つた。苦しいまゝに色々の歌集を播いて、逆境の歌、不幸の歌等を漁つて讀みかへしてみたが、結局性格の相異と云ふか、努力の不足とみるべきか、自分を鞭撻する何物もなかつたのである。

甚だ逆説的ではあるが、この一年は歌へぬ年として、自分の短歌生活にも生々しい記錄を永久に傳へる效果があるのであらう。まづい歌を殘すよりも或ひは雄辯にこの一年を傳へるかもしれない。

二月二十六日

雲重く身ちぢまる思ひもて出勤すれば、流言蜚語止まるところを知らず。見下す街路には顎緒をかけし警官の姿いかめしく、道ゆく民衆も沈みがちなり

曉の帝都を報ずる流言の極まりゆくに暗き思ひす

待ちわびし夕刊はただ春雪の帝都を記して何事もなき

あけ放つラヂオのうなり高まりぬ臨時ニュースを今は聽くべし

國を憂ふる心極まりてアナウンサーの聲おのづから重しと思ふ

金閣寺

きさらぎの日は山窪に落ち來り林泉の垂氷のしたたりやまず

雪解水凝りしづもれる鏡湖池に松の秀枝の影深深し

寒さにけおされつつ拜觀人の揃ふを待つ間寺院經濟の行きつくべきところに思ひ到る

經濟を拜觀料にたよりつつ傳統を保ついかめしさに馴る

肅正選擧

國民の總意さだまる日といふや粉雪のなかに國旗ひるがへる

惑ひなく投票せしがなまなかに人に祕すとて心たかぶる

大學病院

藥劑の鼻つく中に入り來り命めでたきをつくづくおもふ

汗たらし氷割る婢の並び居るこの病棟の眞晝寂しも

たまきはるいのち危き友の寢顏に寄り來る蠅は不吉を運ぶ

病みこやる友を見舞ひて歸るさの赫々あつき陽に堪へかねつ

紅葉

栂ノ尾高山寺にて

錢出して庭に入りゆく衆と別れ門の紅葉を觀て下りけり

高尾より清瀧へ

山しぐれ溪に霧ひて繪羽織の乙女らは楓の下にためらふ

愛宕ケーブル

時雨はれてうすら日ゆらぐ山腹をしづしづ降るケーブルカー見ゆ

參禪行

尾田茂彦

參禪行

禪寺の夜は寂かなり一山は寺門をとざし早く臥せる

雲水の修行僧あはれ初夜ちかく夜座を解かれて漸く眠れり

薄暗く堂内照す燭一つ煤けし障子の破れより見ゆ

夜の街の淡き灯かけのまたたきを山堂に居てはるか見おろす

山堂の森深々と夜霧こめて遠々に打つ板の音聴こゆ

かりそめの參禪なれば洋服のまま禪堂に入りておもむろに座す

何處ゆか犬の遠吠しきりなり禪堂に籠る夜の靜寂に

漠然と心虚しく禪堂を出づれば夜空に星のかがやく

早起きの僧が捧ぐる蠟の灯は障子明るく映らして過ぎたり

午前四時早起きの僧の振り鳴らす鈴ゆるやかに眠りを覺ます

曉近き僧堂の眠りにゆくりなく冴え〳〵と聞く井戸車の音

曉近き朝の勤行に雲水ら般若心經を高らかに誦す

春寒の冷えせまりくる僧堂に朝の勤行を虔しみて聽く

堤防風景

土堤下の叢みちにトラックの轍の跡の太く殘れる

鋪裝されし堤防をゆく自動車のタイヤの音の心よく過ぐ

川岸に沿ひて下り立つ子供等にまつはりてゆく黑き犬あり

堤防に自轉車置きて日盛りを木蔭に眠る人を見て過ぐ

對岸を沿ひて流るる水隈は磧をへだてて日に輝やけり

橋際に停れるバスの日に照りて車體のかげに車掌等は憩へる

堀り返す磧は遠くかすむまで砂運ぶ人等の動けるが見ゆ

保津川

木々の色稍黝づめり山川のよどめる淵に映れる見れば

前山の梢は風に靡きつつ谿川暑し風の至らず

防空演習

銃の音けたたましきに眠さむれば朝あけの空を飛行機の過ぐ

小銃、機關銃、高射砲のとどろくを聽きつつ朝の顏を洗へり

本を賣る

生業にかかはりの無き書物多く購ひし悔いのひた湧く夕べ

撰り分くる努力に堪へで亂したる書物の中にしばし放心す

こぼれ米

古川貞二郎

私の作歌態度

◎世の中が複雜化し世智辛くなればなる程、同樣に雜念を拂拭して精神を統一する時間と自己反省の時間とが必要だ。私はこの意味でも短歌をやる事は有意義だと思ふ。

◎新興短歌や或一派の歌は短歌でないとは言はないが、少くとも短歌の本流を行くものではないと思ふ。言ひ換へれば狹い窮屈な本流を逃避して變つた廣い枝流を行かうとする卑怯な道だといへやう。

◎短歌の意義は一種の短詩の形式によつてのみ掴み得る人生の內容を、各自の個性を通して藝術化して表現するものであらねばならぬ。

◎一匹の蟻、一羽の蝶、一つの庭に對して私が何を感じ何を表はし得たかゞ問題であるが其の意圖は上述より出發してゐる譯である。

こぼれ米

採光の窓ゆ射す陽にとぎ米のこぼれ冷たし秋の厨べ

萩の葉に垂るるあげ羽の蝶ありて昏れゆく庭に動かざりけり

露に光る萩の一株蟲飛びて風立ちにけり曉のこの庭

ケーブルカー近くの尾花小搖りつつ聲立つる子等乘せて往き交ふ

曼珠沙華紙に卷き持つ子のありぬ彼岸詣の人群の中

老父の古き唄出でて家ぬちは笑ひさざめく秋祭かも

眞陽い照る雜頭紅き畫にして落葉を踏みし猫の跫音

圓山の秋の入陽は炎えながら落葉たく火の煙(けむ)にうつろふ

中秋の月に眞向ふ校庭にぬぎ捨てられし草履片足

故郷の秋を思へば懐かしき山畑の柿は熟れてゐつらむ

野良猫のよべ投げ捨てし魚の骨嚙る音すも夜は更けにけり

庭の花伏してすがれの目立ちけり喘息病みてふた月のけふ

青みたる注射のあとの多きかも病みて久しきわが股の荒れ

喘息にあへぐ吾(あ)を見るわが子等の青ざめて夜を寢ねむともせず

まがなしき今朝見し夢の消えやらず朝餉の飯のうまからぬかも

爭ひし夜の寢ねられず時刻む時計の音に痛きおもひす

露いまだしとどの庭の夜のあけを既に咲きたり石竹の花

庭石のかげに群れたる雪の下ありやなしやの花持ちにけり

霖雨に繁る狹庭の叢ゆ今宵蛙の聲しきりなり

紫煙追ふて思ふことなきこの朝庭の菜種のほろほろと散る

動かざる庭をもつるる蝶二つ青菜の上に擅ままなる

月あかり屆きかねたる庭隅に動くと見れば白き猫の仔

ながら雨の來る日來る日の水溜我が家の庭に蛙來て啼く

夕昏れて麥の葉裏に下がる蝶ほのほの白き花に似てをり

石抛れば麥の葉裏に休む蝶の少し飛びけり昏れゆく野みち

宇治平等院

滋賀の海になぞらへしてふその林泉の花散る水に蛙浮きつつ

伊東音無川二首

伊東なる溫泉の小川に鬻罩めて鰻釣る人の笑みかけにけり

紅椿映せる水にふと小石投げても見たき心地せりけり

杉苔の花たちならぶ植木鉢黑蟻一つ歩きなづめり

庭に射す朝の陽脚に冬の部屋掃く埃白う渦まきてをり

白根山雪冴えて今日冷えしるし中禪寺湖の波たちにつつ

夏來とも行くべきところ無きわれに啼きしきる蟬の喧ましさかな

四十近き吾を見むとて來し乳母の手の皺固く日に焦けてをり

子等の居ぬ家居は何か物足らず重ねられたる玩具の小箱

聲無きに見ればフランス人形を手にしつつ子はねむりたりけり

手にしたる花投げ捨てて走り寄る子は旅よりの父のこほしや

休み日の心ゆるびに秋の日の陽射しの緣に寢椅子出したり

太る子等の脊を流しつつしみじみと生き甲斐をおもふ朝の湯殿に

たまさかに妻といさかふ日もあれど笑ふ日つづく子を持ちてより

幾月か塵にまみれし琴二つ妻手に觸れず子になづみをり

正月はやはりよきかな靜かにも碁の客に夜を更かしなどして

旅日記符諜もて書く祕めごともありて笑ましもわが若きころ

くさぐさと話仕懸くる人ありて歌まとまらず汽車の夜の旅

肉を喰ふ菌

稲山熙一

はしがき

壁ひとつ隔てた隣りの家からもう水の音が聞える。外は霜らしい。ほの暗い部屋に起き澁つて居る自分である。四半斤のパンの皮を剝いて六つに割つたのが狐色に燒かれて眞白いパン皿の上に二つ宛重なつて並んで居る。傍らの牛乳からは今盛んに湯氣が立つて居る。手編のセーラー服にエプロンをして御行儀よく坐つた五つの女の兒、小さい肥えて膨れた手を圓い膝の上に置いて母さんがバターをつけて呉れるまで待つて居る取りすました顏。一坪に足らぬ庭にそれでも季節になると一杯花をつける山吹と山茶花。板塀の下でさへ虫は自分ながらの歌を奏でる。

齷齪とした世の中に名利をのみ追ふて走るものが幸福か、自然の感懷に抱かれて淋しさに吐息するもののみが不幸か、とまれ私は歌を詠んで居たい。

肉を喰ふ菌

皮膚の下肉のおくどに喰ひ入りて吾をくるしむこのまがつ菌
おのれわが肉に喰ひ入る病菌の眼に見えざればとらへもならず
いつしかに吾身に巣喰ひつぎつぎに殖えひろがりしこれの病菌
むづむづと痒さに堪へぬいまはしも吾肉喰らひ傲れるか菌
手といはず足肩背や頭まで喰ひ荒さんとするかこの菌
全身の喰ひあらされし見てを居りみにくさゆゑに風呂へは行かず
八ッ裂にするともこころ癒ゆるなし吾肉を食み食み喰ふ菌（むし）

吾肉に喰ひ入りしままにたはやすく滅ぶとはせぬこの病菌どもめ

胄々を塗るはいとはし嘔吐さへもよほすこれのくすりのにほひ

をそひ來る痒さいよいよ苛だゝしかけば病に惡しといふに

いまははや痒くてならずえ堪へせずこの一ところ切りて棄つべき

三月經ていまだも死なぬ病菌の生きの强きに驚くものか

梅雨の日のしめくらしたる部屋にしてさらにいとはしくすりのにほひ

塗りつけて塗りつけてはや三月なり肉の奥處に菌はまだ居る

はなされぬ襯衣とズボンに泌みつきしくすりのよごれくすりのにほひ

目に見えてよろしと思はずこのほかにかなふくすりのあらずといへど

岡山に廣島に行き吳に行く遊びにさへ吾をなやませし奴

かきむしるたびにひろごるこの菌のもともよろこぶ吾が肉とはいふ

急がずて癒ゆる日待たん夏に向ふこの時期わるし皮膚の病に

吾兒のことなど

しかられて泣きつついまはつかれたらし飯食さずして兒は寢入りたり

いささかのことにも怒りよくわめく父を父とし生き行かんなれ

酒のみの子にてあらぬをなにすれやかばかり酒のこひしき夕べ

のめばすぐ醉ふ質ながらかかる日は何は措いてものみたき酒ぞ

ときたまに緣の戸をゆる風ありて今宵しづかに雪つもるらし

秋

一坪のあるやなしやの庭にしてゆたけきものはこほろぎのこゑ

一坪にみたぬ狹庭のこほろぎは板垣の根の土になくらし

白帆はも動くともなくはるかなり家並の上に見る秋の海

行路

山野茂友

序文

落着いて靜かに心を打込んで見たいとは思ひつゝも、何とはなしに躊躇して、ついつい徒らに、時日を費すのみで、一向歌道に精進する事なく今日にある私のこれらの歌は、識者の眼に甚だ幼稚に映るであらう事は是非もない次第である。

勤めを終へて歸宅の鋪道を、山路を歩みつつある時に、折々少年の頃の華やかな憧れを思ひ出して微笑されるのである。

この樣な時にしみじみと、人生はと云ふ樣な事を考へて、眼にふれゆくものを歌にして見る事が多いので、ここに集めたものを「行路」と名づけた。

行路

何處へ渡り行くらむ鮮人土工の切符買ふ手に銅貨の多し

花の道醉ひ歩み行く傍に鮮人土工は汗にまみれをり

劇場ははねて群れ行く灯の街に屑箱あさる人も交りぬ

使ひなれぬ町の言葉にて道を聞く在所娘に所をしへぬ

默々と耕す人の聽きてゐむ芹つみ遊ぶ女等の聲は

人見えぬ天文臺よりひそかにも聞ゆるものはタイプライターの音

秋までは續かぬ持米賣りに行きて子等の晴衣を求め歸りぬ

日に五枚疊表を織りあげて五圓になりし事ありと聞く

嫁ぎゆきて高女卒業の見榮もなく疊表を織りて暮すか

石炭に燒けし双手におのづから眼のゆく妻に眼を注ぎ得ず

校庭の花爛漫と聞きたれど内職いそぐ妻には語らず

夕刊に低金利の記事は大きけれど我はかかはりあらぬと思ひぬ

眞夜中に目覺めて父の健やかと思へぬ寢息きけば悔あり

想念の眼閉づれば瞬間に花散る燒場迫りて距る

縣境の標柱白く陽に照りて憩ふかげもなき道ははるかに

颯爽と泳ぎゐしをんな女工らしき身裝(みなり)となりて歸り行きたり

看護婦の瞳は何にみいるらむ窓によりつつ花火見上げず

ふるさとの雨降りてゐし驛に咲ける夾竹桃の花を忘れず

つつましく塔婆抱きて寺を出づる骨上げに來しか乙女にほやかに

夕まぐれ杉の木立に降りかかる時雨の中を烏鳴き居り

冷え初めて雨となるらし夕風に湯殿の小窓閉めてつかりぬ

雨ふくむ風とはなりぬ夕まぐれ流れに馬の足洗ひ居り

薄曇る日の佗しさよ背戸に出づれば柿の落葉のかそかなる音

燈火の目をひく歳末の夕まぐれ傘にかくれて歸る人あり

雪解の雨滴の音しきりなり部屋に明るく陽は和みゐて

風來帖

小嶋空念

はしがき

事々物々に觸れての心の動きをそのまゝ詩となし、其境地に安住することが出來れば、それはとりもなほさず宗教であらう。古い言葉ではあるが物のあはれを知る心、それを短歌と云ふ詩形を借つて三十一文字に表現し得る文藝を持つて居る日本人は、其點甚だ惠まれて居ると云つていい。それには色々の理由もあるであらうが、歸する處國民性の然らしめたものであると思ふ。多かれ少なかれ誰にでも歌心と云ふものはあるもので、自分もこれに志してから既に可なりの時を喰つて居る。併し自らの不精進の罪で未だ會心のものは一つもない。と言ふことは自分の內面生活の貧弱さを白狀する譯で詢にお愧しい。近頃漸く同人の驥尾に附してヨチ〳〵と歩んで居るが、近作の一部をこゝに纒めて「風來帖」と名づけ、敢て諸賢の笑覽に供した。

五月雨どき

さみだれのリズムとなりて耳をうつ寢覺の眼にさゆるみどり葉

かれこれの思ひも堪へていつしかに五月雨の音に聞き入りてあり

こもり居て五月雨の音に聞き入れば暮るる夕べは佗しかりけり

夕もやは街の甍に立ち罩めて靜かに暮るる春の夕ぐれ

石塊の道にひしがれて萠えいづる名もなき草にしばしたたずむ

すや〳〵とこの手に睡る子をみてはひたすら强くわれ生きんとす

朝まだき車窓はるかに桑をつむ村の娘に雨しきりなり

動脈硬化の父

たまさかに會へば涙すおい父のうしろ姿に淋しきかけあり

茶を汲みてやすらふ父はわがためにすゝめ給へりうれしくもみえて

人の世のわざはひしげきおい父に酒を召せよと言ふもあだなり

折々に亡き弟の憶ひ出されて

思ひきやわれの病床に語らひし汝と別れの永久なりしとは

ありし日を憶ひうかべて兄ならぬこの兄今更何をなすべき

いまはまで合掌のまゝ救はれし命の主を禮讃するなり

水道異變

昭和十一年一月數十年來の酷寒來と云ふ折

水道の破裂を報て今日もまた電話しきりて夜もふけにけり

水道の凍結ながくその處置をせまる怒聲は今日もたえざり

懸命のてだて及ばず職夫等の心もおひ〳〵すさみゆくらし

職夫らは眼血ばしり頰こけてもの言ふさへもいとはしげなり

辨當を焚火にぬくめかたときをむさぼるがごとまどろみてあり

あかつきにおよぶ作業の今宵また酷寒來をラヂオは告ぐる

このさまはいつ果つるかも當事者の今日この頃はうれひ顔なり

このときに職夫の人の尊さよこの吾はものの數にもあらず

かにかくに寒さぬるむと覺えしが今朝ははからず雨もよひなり

洛北にて

この春のすぐき畑に家建ちて家並に借家の札のかゝれり

柊野に赤き瓦の家建ちてペンキ塗りたての札掲げあり

妙法の山も赤膚あらはなり貯水工事のハッパとどろき

『瑳あと』以後

山中刀葉

序　文

『避あと』以後、三十八首、主に昭和十年、十一年の作を收めた。昭和十年正月、私に子供が與へられた。それ迄人生に對し幾分か懷疑的であつた私は、こゝに生甲斐を感じた。子供を通して見る世界は驚異であり神祕であつた。私は新しき視野をその周圍に見た。

私の短歌に於て、此際、少くともその生活の昂揚的變化と共に昂揚され、充實せられねばならなかつた筈である。が、子供は悲しむべき事に弱かつた。さなきだに煩瑣であつた私の生活周圍はこれが爲、より交錯し惑亂された。加之、子供の爲に數度の轉宅を餘儀なくされた。これは益々私の生活の落ち付かなさに拍車をかけた。私はくた〳〵に疲れて了つた。

この三十八首は疲れ切つたものゝ、とりとめないモノロオグである。

（昭和十一年秋）

霽間

たまさかの霽れ間を集ふ兒等の聲青葉どよもし大空に擴がる

遊び呆け歸りを忘れし童(わらはべ)か夕闇の中にブランコの音す

青嵐一吹き過ぎしたまゆらを噴水の音のひそかなりけり

榮轉の友へと贈る祝言(ほぎごと)におもねる心なしと云はずも

情實の世相うべなひ得ずしてひたむきに醜きを泣きて語る友なり

忍從の生活に馴れて情實の醜きも遂にうべなはんとする

按ずれど歌まとまらず心とみにいらいらしきを吾兒泣きしきる

伊豆

流されし七夕の笹波にゆられゆられ荒磯の邊に追ひ返されつ
曲り淵澱めるままに波立つと見るや自動車は急カーブする
肌にしむ嵐氣冷たし見返ればにぶく光りて伊豆の海はあり
眞夏陽も屆かぬ窪みにひつそりと伊豆山人は家居せりけり

光悅寺

ここに來て磬の遠音に入りまじる落葉の音を聞きとめにけり
つぎつぎに芒ゆさぶる風のみち見まもり居れば眼疲れたり

菊の香や古寺の椽に父と子は言葉少なに日向ぼこせる
この寺の日向の椽におのがじし思ひ耽りてひと日けすべし
隙間より日光一筋するどく入りて疊のしめりにほひたちつつ
張り替へし明障子に裸木の影を落して陽は斜なり
閉め切りし障子の白さ眼にたちてこのふる寺は黃昏れむとす

奴凧

正月の陽射しぬくとし窓開けて子に見せてやる揚げ奴凧
吹き霽れし蒼空にうなる奴凧子はいぶかしみ指さしさけぶ

牡蠣

土間隅の牡蠣殼にあるたまり水溜りしままに凍てて居にけり

牡蠣殼の水玉が放つ反射光線黄昏の土間に見れば冷たき

たそがれの厨にかそか香ふもの三和土(たたき)に置きし冬ぜりと牡蠣

雜鬧

飾りたてし小旗ゆるがすそよ風やこゝを行き交ふ人の明るさ

賣り出すと大仰に飾りし商店街の雜鬧を行きて心虚しき

初節句

初節句と乏しき錢に人形を買ひしにあはれはしか病みにけり

飾り立てし五月人形は熱にあへぐ眼をあけてわづか見にけり

五日經れど熱未だ引かず飾り立てし人形の埃夕陽に顯(た)ちつつ

熱の香(にほひ)ほの漂ひて夕翳に武者人形の金具うき顯(た)つ

熱はあれど機嫌よければしまらくを子に見せてやるその鯉幟

子供漸く寢入りて暫しのやすらひや障子あくれば泌みる若葉のいろ

轉宅

紅薔薇ま垣に咲ける家もあり馴染まぬ道を今朝は歩むも

そのさまはささやかなれどこの家や開け放つ部屋ににほふ若葉風

晃、重病

重病との報に馳せ歸る自動車なりふき出る汗を拭ひあへず我は

生死の思ひ凝りつつ妻とあり梅雨めきし風の吹きつのる宵を

消えなむとする生命のほむらひたむきに堪ふけなげさは我を泣かしむ

我も妻も涙ぐみけり言葉なくて危險去ると醫師は云ひてけらずや

危險去ると醫師の言ひて去にし午前この眞夏陽を暑しと思へり

神童子峠

土岐朝裕

序

作歌幾年遲々として進まぬは憂へず。

世評に追從するは平凡なり。心弱ければ感傷に陷り、

才を恃めば意圖的となる。

平明自然にして滋味あるこそ中々に難けれ。及ばずとは言へ、この道にいそしみて、樂し。

神童子峠

豫期せぬ原に我は出で來て草いきれ蒸し立つ中に佇みにける

下草に一むらがりの桔梗の咲くに明るく陽のあたり居り

山の上に立てれば陸の起伏のうち煙りたれ雲低く見ゆ

うつしみに照らふ日光の消え失せてかほそきものか木草騷けり

東山

まなしたのつばら松立ひと群の煙上りて薄れつつあり

三つの道別れて居るにあてもなし廣かる方を選びてぞゆく

汗ばみて登る山坂たけのびし杉立ゆれて遠き音あり

木の稀になりけるなだり降りしきる風に吹かれて下りけるかも

秋

鴨川の夕の隈に寄る家鴨とみに昏みてなほ白く見ゆ

曼珠沙華ひとときに染めし堤防にこの曉の露はしめれり

急角度につばくら二つ落ちてけりやや枯色の原の黄昏

籐製の疊冷くありし日を秋の夜更けて思ひ出だしつ

空虚

まむかへる疏水今日乾て泥の香のにほふ夕となりにけるかも

夕あかる一木の柳岸に立ち小暗き方へ舟ゆかむとす

あてどなく我は出で來て歩めども終には遠くゆきえざりけり

保津峽

入りゆかむ西の彼方や垂雲の山脈の秀を覆ひかくせり

ふり仰ぐなだりの檜木々毎につばらなれども枯れし一本

釣橋と思へぬばかり丈夫げの橋を渡るにさゆらぎにける

道の邊の大木櫻と思へども時雨るる峽に梢仰がず

何はなく小草手折りて打振りて金鈴峡を歩みてぞ來し

山家

深谿のまぎはの路の幾曲りまがり來りてわれはきにけり

岩の後に白々として瀬の光りここに盡きたる路は續かず

見上ぐればくぐもる空の狹き迄に山こそ迫れ響く水の音

山陰線山家の驛に乘る汽車のわが反對にゆくと思ひし

雨日日に降りたる國と山一つ越え來し保津の水枯れて居り

ゆとりありし旅もをはりの汽車にゐて身は自らまどろまむとす

PRÄLUDIEN 風に

糟谷敏英

序として

一人の男が自殺する場合に於ては、自殺する男と自殺される男とは全然別人である――と見る觀察は仲々面白い。が、個々のものを個々の目的で見る事以上に、それを全體的に見ることがより大切なことである。

× ×

短歌は方法のイズムとしては、超自然主義的なものである。(それは三十一と云ふ定型のもつ宿命である)然し、對象となるものは、現實でなければならぬとする。この「方法」と「對象」との交錯――こゝに短歌の生命があり、あらゆる短歌理論は必ず此の關所を通らなければならぬ。

× ×

こゝに集められたまづしい歌については、いゝと思ふものを選ぶと云ふより、それが悪いものであるとは知りつゝも故意に、集めたものがかなりある。それは外でもない。過去に於て如何なる歌をつくり、而していま如何に進歩しつゝあるか、即ち過ぎたものゝ中からいゝにしろ悪いにしろ、記念となると思はれるものを集めて、明日への指針となす意圖に外ならぬ。何々集とは名づけ得なかつた理由である。以て「PRÄLUDIEN風に」とする。

雜（I）

うがひするこの水は琵琶湖の水、コップにたたへて日本晴のうがひ

家に歸りて野の印象、いねられぬ目に陽炎の燃えつづく

精蟲の移行

進み行く萬象の發展律、海月の分裂を感じて横たはつたまま

選擧事務

ラヂオ體操のリズム流れ來る講堂で自分も選擧のいかめしさを作つてる

口笛のよくなる空氣の中を電車降りて一町家路を歸る

樋にかかり居る古いボールが誰拾はうとせず雨にぬれてる

友との論爭に午報鳴り出し互に顏を見つめあつてる

電熱の講習に來る女たち嫁ぎてよきパンよき菓子作れ

日蝕

蠟煙ガラスにあてて日を試すも赫々の光いまだ變らず

ガラス透き日蝕の日に面さらす片の目すでにとぢて力す

碧空のいづこをか月の走り居り日に近きかけ見えず迫り來る

視入る日の缺けつつ行くに驚きを知らざる淋しさの湧きてやまざる

まじろぎもせず碧空の先々に視線を馳するさがも生れし

雜（II）

青麥の青きは海に傾きて岬となりて海に注げる

ウインドに立ちならび笑むマネキンの裸身のままに梅雨も暮れ行く

東の山に續きてなべてもの荒き相なき朝歩めり

靜けさのこもりて朝ほのぼのと明け行く水際小魚はね居り

齒磨粉口より散れば微細なるその數々に朝陽ふり居り

蚊帳たたむ裸身の男蚊帳もちて開ける窓に口笛吹き居り

さざめきの聲とおぼゆれば大岩のかけよりハイカーの女群現はれぬ

栗のいがの青きが一つ溪流の眞中を流れ來て淀に沈みぬ

妻

皿にのる物みな白き湯氣のたつ此の夕餉みな妻の手作り

すすぎては流す水の音心地よし白き布地は朝陽に光り

新妻は小遣ひ少しもいらぬと云ふ我給料の額知り居れば

朝夕を妻はく庭のこのごろは青き苔の香ただよひて來る

いさかひ

悔いつつも背向きて言なき己が態のみぬちやるなきは心雄泣きの

雜（III）

風水害の鴨川に立つ

うろくづの土砂にうもれて朽ちしまま磧の底に消なんとすらし

闇遠く海の底鳴ふと絶えて死びとと深き夜を動かず

緣の陽にさらせば足の青白き日曜の陽を受けつつかなしむ

外にあらきはやて過ぐるとき俯伏せの頭擡ぐれば落毛散りばふ

偶

像

井上正子

序

同じ角度をもつて前進してゐる時計の指針をみると、實に偉大な感にうたれる事が多多ある。同じ日を、同じ事をくり返すことは、平凡で嫌だと云ふ人もあるかも知れない。が平凡ほど賢明で幸福な道はないと、私は思つてゐる。平凡を求めてゐるかも知れぬ私だから……。何かの拍子にターンを間違へて、相手を不快にさせ、又自分も不快になると、元の正しさに早くなほすのが當然かも知れないが、決して私はそれに努力を拂はないで、そのまゝに先を續けようとする。違つたステップを元のステップに返すのは容易かも知れないが、心に受ける感動の場合だと困つた事になる。私の歌につき考へてみるに、昔は平凡な歌を作つたものだ。今でも平凡かも知れぬが、昔と違つた事は事實に違ひない。或る人からみると何の變哲もない歌かも知れぬ。昔が好いとも思へないし、現在が好いとも思へない。平凡を求めてゐるやうで、飛躍を焦慮してゐる自身の矛盾に、時々大聲をあげる。

とほき思ひ出の歌

この丘のゆるきなだりは海にのび青々として野菜畑なり

冬近き今日のひと日をこの丘にいのち安けくわがいこひをり

秋山の夕冷えしるく小鳥らの塒に急ぐ聲とほるなり

啼きてゐし小鳥の聲の止みしかば山の木原は俄かに暮れぬ

旅のうた

落着きしあきらめが胸に祕みゐてチョコレートや本など買ひて樂しむ

ロマンチックな思ひ出が胸をめぐる時急行列車は走る夾竹桃の中を

思ふ事すでに何もなくなりて闇にひゞきて汽車がゆきたり

病中吟

うつりゆく鳥影はあれどわが病床に訪ふ人のなくて今日も日暮るる

一切の世の現象はうつりゆく鳥影に似てはかなかるらむ

人まつといふにあらねどうつりゆく鳥かげに心戀ひにけるかも

ある感情の推移

投げ捨てしペンは机上をころびゆき疊の上につきささりたり

つき刺さりしペンをにらみて沈默の爭鬪をつづくる吾にしありけり

憤懣の堪へがたくして破りしが書き改め書き改めし文なりしかも

とめどなき疑惑懊惱はおのづからこの狂態となりゆくものか

やゝやゝにおのが心の靜まりてやがて大きく泣き出しにけり

こころ

夜ともなれば夜ぎりのねやでからくゝと肉體のかけらが嘲ひ初める

夜ともなれば夜ぞらの果の亡骸を虹の花輪で飾つてねむる

一枚の紙さへ破れぬ女らが住む花園は常不幸なり

まひるまのかげろふよりも速やかに忘却を生む卑怯なこゝろ

むら〳〵ともえ上る憤怒がにこやかに街上で交す季節の挨拶
情熱のかけらなんぞのない森で花や蟲らとささやき明かす
默々と紅茶をすする心なり窓に夜ぎりの外人街がふくらみ
角砂糖を二つづつ入れた手が退屈をぬりつぶさうとくゆらす煙草

水上飛行機

水上滑走よろしきを得しか爆音ややととのひゆきつつ白雲を破り
海ややに暮れゆくものを上昇下降上昇下降くりかへされゆく

噴水

公園の噴水を兩手で抱く時が一等愛しい想ひかも知れぬ
まひるまは童兒と語り夜ともなれば祕めごともきく噴水の生活

挽歌

黑い風が消してしまつた魂の亡骸にせまるやるせない動哭
かけろふのかたまりとみれば青い風さへ壁の中から消しにきかゝる
北向の窓から青い風が吹きわが父のいのち今日を保ち居り

斷想

超然と構へてはをれしら雲の秋ともなれば木原ぞ想ふ

心の祕密を握つてしまつたしら雲は野づらの果にたゝまれてあり
黄昏のペーブメントに流れよる落葉が歌ふ生活の設計
アヂス・アベバ陷落せんの鈴なれば棕櫚は月夜でをのゝきなけく

くだけた心

さみしさから逃れようとする卑怯さを背戸の野鳩はなぐさめもせぬ
ちり〳〵にくだけた心のかけらなれば野鳩さへもがふりむきもせぬ
こなごなにくだけた心と心なればピストルを擬さうと地が溶けやうと
庭に來てむつみさへづる小鳥らに吾の孤獨は告げまいとする

白光

田村六郎

螳螂が
ノロノロと草の上を這つてゐる
そよと吹く風にも薄の白い穗はゆらぐ
何處かで
草の實のはぢける微かな音
赫く
それこそ鐵の燒け爛れるやうに赫く
日輪は最後の光を投げかけてゐる
その寂滅の光の中で
喘ぎ乍らも蟻は兵糧を運ぶのに忙しい
けれども
自信たつぷりに
螳螂は
ノロノロと草の上を這つてゐる

稻荷山

混凝土（コンクリート）の塀廻らせる中にして藤原俊成の墓はありけり
斑雪未だ殘れる奥津城に午後の陽は淡く我が影を落す
山路を行くに人なく立ち止まれば何處をか水の流るる音す
山路を人は通はず昨日（きゝ）の雪積りしままに解けなむとす
里近きに山路を行く人もあらずしじまを樹より雪の滑る音
ひそやかに降れる粉雪を見てあれば暗むお山に今燈（ひ）は點きぬ
夜半醒めて氷雨の音を聞きたりしが朝は雪となりゐたりけり

氷雨降る朝の山を尻からげ草鞋履きし人のあまた登り行く

降りしきる氷雨に濡れて老婆は聲高らかに祈り續け居る

山科大石神社

山の脊の平に一つ家ありて土間の暗きに人の氣色(けはひ)す

畑に降りし大き烏の羽ばたける羽黑々と春陽に光る

山の上の天文臺の白き塔淺葱の空に圓く光れり

御手洗の清水含むにすがすがと土の香を微かにもてり

青竹よ噴き上る清水はくづれ落ちかそけき音を立てつつは居ぬ

花園妙心寺

暗き中に仰ぐ佛殿の軒を高みおぼろげに見ゆ國寶の二字

天授院の門開き居りて昏れなづむ庭を老僧の歩めるが見ゆ

薄暗き毘盧藏が中に埃つきておはす御佛は見らくかなしも

目近かなる此の御佛の綠青の褪せたる見れば年經にけむか

樓門の小さき潛門(くぐり)を我が出るや卽ちにほふ雜草の香

ある時

夜更ちて雨はいよいよ募り來ぬ未だ歸らぬ母の上を思ふ

友人白虹を訪ふ

幾度か來し路ながら塀かけに紫苑の芽立ちはかつて見ざりし

蠡蠏まだ幼くて庭隈にしばしば鳴けど長く續かず

宿醉の未だ解けざる白虹は歌の話にもすぐに倦めるか

との曇る空は動かずひねもすを裏の水漬田に蛙しき鳴く

鬼薊咲くよと見れば山なだりの草生が中にそこにもここにも

櫻並木の土手を廻りて見に行かむ眞白き睡蓮ここだく光れば

陽だまりに茶の葉乾しつつこの媼明るき聲にもの言ひかくる

紫野聚光院

沙羅双樹茂り深きに唯一つ白く小さき花の殘れる

一日を保ちあへねば花片は青苔の上に白くたまれり

利休の墓

樫の木の下に苔蒸す石塔は見たるばかりにて通り過ぎたり

競市

前鉢巻の威勢はよけれ此の親爺高く呼びつぐ競り上る値を

青黴の色なまなましき靴三足貳拾錢にてすぐ落札(おと)されぬ

繩暖簾のいたく汚れしは値をつける人もなければ放り出されぬ

弄きて競値叫べる時の間はただならぬ氣色(けはひ)の漲るを感ず

灰皿

高阪盛太郎

序

灰皿にバットの吸殻がたまるばかりである。寢に就く前のひと時は、ほんたうに自分が自分自身に對座し得る時である。四疊半の貸間に紫煙を充たしながら、貧しい一日の生活を反芻してみるのである。反芻の後に殘るものは、煙草の吸殻と、それから吸殻にも似た歌とであつた。よかれあしかれ、私の歌は私の生活の反芻から生れたものである。作つた當座は慰められもし、吾ながらうまく出來たと思つたものも、今ふり返つてみると、見るのも厭はしいものばかりである。

灰皿は吸殻で一ぱいである。堆積した吸殻は捨てねばならない。そして、灰皿は新たなる吸殻の山が築かれるのを待つてゐるのである。

（十一、九、二九）

煙草

釣り要らぬ錢を握つて街角へゴールデンバット一つ買ひに行く

口にするだに馬鹿げたこととは思つても尙こだはつてゐてバット吸ふばかり

雜念にかかはり居れば吸ひかけの煙の長さが己を待つてゐた

敗北の己を夜つぴて尊重した借りてる二階に煙を充たして

首の上にいつかど載つかつて此の頭め鼻の穴から煙を出しをる

夢を描く自由だけのその日その日せめて煙草を輪にふいてゐよう

たて續けに三本ばかり煙にふかしあるかなきかの自己をまさぐる

火葬場

火葬場に明くるを待ちて來りしに早人一人煙(けむ)になし居り

休憩室の苦き番茶を啜りつつ言葉少なに燒くるを待ちぬ

白骨となるしばらくを火葬場の休憩室にて番茶いただく

のど佛見事燒けしと手のひらに載せて自慢の穩坊憎めず

お山より歸る自動車は幾度かお山に急ぐ自動車とすれ會ふ

製材場

ひねもすを製材場は働きて春の神經をきりきりともむ

單線の鐵道線路横切ると製材場の小氣味よき音

臥草

昇格は吾に沙汰なく退廳を御所の芝生にしばしなづさふ

芝原になづさひ居ればすさまじき五月の空の青さ迫れる

青空を見つめしましくもの思ひなし木々の囁きうつつに聞え

青空の深さつくづく眺められ何か心に足らふものあり

痙攣が瞼に居りてぴくつけり氣にする程に動きをやめぬ

草に臥すわが手枕にチクタクの時計の刻みさやかに聞ゆる

飽滿な若き綠の中にあり忘れかけたる希望もたける
芝原を狂へる如く驅け巡る尨犬の躍動を痛切に嫉妬す

日蝕

隻眼の充血はなぞ憂ふべき黑き太陽を見呆けし罰なり
日蝕の黑き陽を負ひて行く人のカンカン帽の白さまがなし

吏員食堂

薄給の吏員であれば列なして十二錢の定食を食べねばならず
何十人の尻へにつきて得てし定食けふも牛蒡を食はされるなり

カロリィの含有がうたた危ぶまる鮭のはしくれあちやら添へたる
十二錢の定食を食ふ吏員たち見ればどこかに相似點あり

役所にて

同じ日の堆積に喘ぐ群であれば一枚の號外にも顏つつきあひぬ
おのづからのわからぬ歌ともろ共に指の先より數字まろび出づ
見つめたる電氣時計が大膽にもぴくりと一分を飛んで刻めり
食ふ爲の職をさけすむ吾ながら一命投げ出すこととても出來ず
吾と吾を抑へることに慣らされし執念き傳統を憎みて止まず

茶房にて

絲なる壁に凭れて茶を喫る冷房裝置の音のかそけさ

さびしさめが首もたげ得ぬ程にまでよくも語りてよくも笑ひぬ

もの言はぬ間の恐ろしさ逃れんと語る話の止めどなきこと

衢の感傷

黄昏を盜みて乘れる軌轢のさ搖れに吾は呆けたりける

地の果の月は人家に落ちもせず黄色に照りてさびしがりける

吾ひとり佇む街の十字路にシグナル赤く青くまばたく

ブラタヌの並木の道は續けるに甘き足踏み今はならぬぞ

車中

運轉手の傍らに立ち疲れたる眼は果てしなきレールに及ぶ

果てしなき平行線をわが乘れる電車はただに行かねばならず

果てしなき平行線を走るもの電車と電車に乘れる人々

朝

怠けたる遲き寢覺めにマドリッド陷落すとふ新聞重し

枚方の菊人形のチンドンが街をあばれてさわやかな朝

紺碧の空に漂ふアドバルーンは吾等の生活の指標でありき

一面のま澄みの空を戴きてけふ再生を誓ひて出で立つ

轢音

和田周三

「櫻音」について

「櫻音」は「白珠」第一輯以後、即ち、昭和九年九月より本年八月までの作品を整理したものであります。

此の二年間に私の辿つて來た道は、此等の作品が示す樣に、小市民的な愚痴にも近い感傷であつたり、或は此の世代に見られる青年の焦燥に濁つてゐます。自選にあたつても、絶えずペンを鈍らせたものは其等の混濁に觸れる慚しさでありました。然し、一方では、此等の作品を纏める事のひそかな安心をも得てまいりました。それと申しますのは、振り捨てるべき過去とは云へ、此れに繋らねばならぬ未來の爲に、又、此等の上に立てるべき今後の覺悟の爲にも、記念されていゝと思ひ至つたからであります。

只、私がおそれるのは、此等の過去が、やがては近づき得るであらう澄明にして高邁なる精神への道程としては、全く方角違ひではなくとも、無用な廻り道ではなかつたかと言ふ事です。

（一一、一〇、一〇）

路傍

衛生展にいましがた居りて歩む鋪道にリリオデンドロンの下葉黄ばめり
ゆがみたる戸口を狹き入營の幟に燈洩れて笑ひ騒ぐ聲
赤黑き肉塊ぶら下り人氣なき肉屋に夜の時報鳴り澄む
一目見し時計に秒針の廻れるが目に殘り居つつ紅茶をすする
白銅貨つまみし吾の指に泌むインクは見つつレヂスターの前に
前に立つ男の服に朝陽搖れ泌める埃の粒立ち明るし

（昭和九年）

微塵

隣り建つビルにあたれる陽のかへり流れて微塵の飛ぶあらはなり
ただよへる微塵のゆらぎ見つめつつひそかなる息を胸にして居り
咯痰は黑く微塵に汚れ居り洗面所の空氣を深く吸ひ込む
勤め終へ出づる巷に頰痛く吹き沍ゆる風を心にたのしむ

瀧

瀧水を五體に浴びて經唱へ人生きつぐを身近に見て過ぐ
己が身を虐ぐる事が生き徹す力となるを人は乞ふならむ

瀧に打たるる行者の祈にかかはらねど山に入り來し己に觸る

吏員食堂

甘鯛の肉つつきつつ盛飯の熱きを傍の同僚(ども)に言ひかく
食ひ終へし菜の乏しきカロリーを思へども胃は滿ち足り居る

快感帶

初夏の小女等街路を行く

きらめきて打ちつれ歩めど五拾圓を如何にして得るかを知るはなからむ
空辨當を摑む手のひらに響きつつ自動車の警笛は馳せよぎるなり

あきらめを呟く同僚に頷きつつ書き寫す數字の手につき居る

なるがままに行かむ思ひを下持ちて己見つめ得ぬ日の多く過ぐ

夏草

烈日を夏草咲ける中に立ち靴の汚れをおとしゐる吾は

靴先に一滴のインク泌みたるが心に觸るるを眞白に塗りつぶす

秋冷

世の眞相つきつむる意慾うち勵し夜更つかれたる眼を本に曝す

行く先を見極むる眼切に欲り本讀めど身の疲れにあせる

スペシアルセール

丸善を出でし鋪道はしぐれつつポケットにつかむスペシアルセールのビラ

事務室の午を來りし手相觀に人等たかりて耳澄し居り

來る日の生命告げたる手相觀の大いなる手にのせられし銀貨

紫のライトに浮びたつあばら骨アクロバチックダンサーは躍りやまざり

觀客に出來ざるポーズなしつぎしダンサーは笑みかたまけて幾度も會釋す

慈善鍋の傍へに若き救世軍茫と立ち居て陽はあたたかし

（昭和十年）

雪空

ふかぶかと身にまつはれるあかときの夢内に軌道の軋みたち來る
身に傳ひ雷雪空に鳴る時しまざまざと吾は數字書き居る
白白と草枯れ亂るる野の道は殘雪に夕べ颯す風沍ゆ
神苑に土運び登る馬は喘ぎ朝陽に光る笞に打たるる
神苑の擴張地に土を下す間を馬は朝陽に白き息はく
新内閣入閣者の名を朝床に見てゐる號外をささふる指冷ゆ
鈍重なる街路の音は汚れたる茶房の窓のガラスに滲む

電車自動車往き交ひやまぬ靜けさを冷えしコーヒーは喉をよぎりぬ

花崗砂層

眞實を讀む書の上は吾が地位を卑下せし書間の翳もあらぬ
身をめぐる花崗砂層に音たてて砂落つるなり風に眼つむれば
石炭を引揚ぐる機械の活動を仰ぎ呆けゐる人等に陽は照り

電話工夫

疲れたりと思ひて佇む鋪裝路の地下にくぐもりて人の聲たつ
地の底に人聲たつを聞きゐるに燥き白ける街路はてしなし

鋪裝路に吾が影もあらず地の底に電話工夫の呼び交す聲す

涼風

谷深し吾が脈搏のひそけくも掌なる小石の顫ひ

青稻田さゆれせつなく匂へるを堪へゐる身にも觸れて風過ぐ

死にてゐる身は瀨にもまれ白き腹きらら夏陽に光りて鮎は

涼風に夜を呆け居れば道に落つる吾が影を踏みて幾人(いくたり)かよぎりぬ

（昭和十一年）

冬青集

河村千秋

序

詩歌が、否短歌が言語藝術でありながら、その本質的傾向として、他のそれらのものに比して著しく非言語藝術的であらねばならぬ――といふ短歌を短歌するものにとつて、殆ど當惑に價するやうな事實に對して、私はもはや覺悟の臍を固めてゐる。事實短歌は、意味の精確なる傳達を唯一の目的とする言語の目的とは同一ではなかつた筈である。然も、あまりにも長く言語の裏に泣く短歌ではなかつただらうか？　何故目的を異にする言語を藉用したかを責める代りに、斯くあらねばならなかつた短歌の宿命に對して、私は人生にも似た感情を以て臨む。憶へば生立ち難い短歌行路ではある。私は穢なき心にゐつゝ、在るものゝ命を在るがまゝに許容することによつて、目的の異なる故を以て、言語の後に、常に不當に壓殺されがちな短歌の魂を靜に悲み、かつ鞭撻する。そして私は短歌と倶に、おたがひの目的が、所謂「言語以前にたゆたふ人間の聲音の表現」にあつたことを固く信じあふ。

――昭和一一、一一、二八――

淺間山　六首

とりよろふ五百重の山の奥にして天そそる山の火の山淺間

澄み蒼き早春の空にたちなびく烟しづしづ動けるが見ゆ

現世の山と念へか春の日に耀く雪の火の山淺間

沓掛あたりにて

末とほく引き制ふ裳裾やはらかに澄み青む空を割りたりけり

神代より噴きつづけけむこの烟さりけもあらず蒼穹にして

うつろなる心おもはずみすずかる信濃の國に旅ゆくわれとも

湯田中溫泉　六首

今宵かも寢ぬらむ宿の湯田中の溫泉を遠みわれは疲れぬ

天ざかる信濃にきてや乘り繼がむ電車乘場をひとにたづねつ

けふもゆく信濃の旅を日は昏れて斑雪の邑に燈はつきにけり

わがゆかむ村はいづくぞひた走る電車の行手なほも山なる

われひとりを乘せて電車は走るなり乘る人もなき驛に停りつつ

山峽の驛の柱に見いでたる文字はるかなり海拔二千尺

善光寺御開帳　五首

七年にただのいちどのよき機會にめぐりあひつつ緣なきわれや

納骨堂建立資金勸請の大文章は讀む人すくなき

山門に墨痕淋漓の勸請文われに呪文の威力もたずも

にんげんの僧侶に頭撫ぜられむと犇くみれば善男善女なり

直經六尺にまる新樽を賽錢箱と知りて止みぬる

鄕土軍凱旋の歌　六首

今日――昭和十一年六月六日

凌々と引緊りたる面焦けて眼のみ鋭き凱旋兵の縱列

をとこをみな馬面まぢかに犇きて旗ふり叫ぶみれは泣くべし

足重くふるさとをゆく凱旋兵歡呼の叫喚きくやきかずや

命ありていまふるさとの衢を歩く凱旋兵は笑みてをらずも

歡呼の狂亂の中をうち默し進む歩兵の脚たどたどし

狂ひ叫ぶ群にまぢりていつしかも眼頭熱くわれはなり來ぬ

佛法僧鳥　六首

あめつちをゆりとどろかす山の音三河の國に夜はふけつつ

山河の響つらぬきて皓々と聽けば啼くなりみ佛の鳥

皓々と啼く三寶の聲かそかこの世にありて啼ける鳥かも

深山の夜を啼きふける法の鳥ころゐしんしんと胸にせまり來

さ夜ふけていよよ啼き澄む鳥の聲ぶつ―ぽう―そうと啼きてけらずや

○

靈山の夜のみ音に啼く法の鳥はたして鳥か人は見ずとふ

薊　草　五首

春の野に花開きながら牛すらも食はぬ薊の花のむらさき

その莖に薊あるばかり人けもの憎む薊の花のむらさき

開きながらその名薊といふばかり憎まるるさへ花のむらさき

憎まれ子野の花薊はればれし人けだもののおもひなにとも

○

たくましき生きの力の薊草にんげんわれの指を刺しにけり

憤る心　五首

憤る心に堪へて生くる日の閑かに重たく春は來向ふ

憤る心こころに湛へつつ凍みのこりたる草の芽を念ふ

憤るこころ今宵は眠るらし靜にわれはねむらむとすも

憤るこころ逸りに術をなみこの身泣かるる夜の明けがたき

憤るこころ疲れてつつましくをればをるとて吾は愛しき

花脊峠　三首

足引の山を深みかこの里に晝照りわたる光のつめたさ

越えきつる峠の路の朝曇おぼろに遠く木々の間に見ゆ

頂の雲に消え入る峠路わが越えきつる山と念へかも

折々の歌　五首

落ちいそぐ木の葉の下に池ありてあらはに深き蒼穹に眞對ふ

澄みとほる池の底に魚あらは黒も緋きも動かずありけり

うら枯れし木草の中に咲きのこる夏のをはりのさるびやの花

明日のためけふ食ひのこす若干の小錢をつひに孺疑はず

○

目つぶれば近き虚空に風ありてあなひやうひやうと鳴りてゐるにけり

卷末小記

君、茲一年間、常に僕達の腦裡を去徠して止まなかつた姿なき歌集「白珠」第二輯が雄々しくも、平安倶樂部短歌會昭和十一年度版として、楚々たるその「現身」を地上に現したのである。——嬉しくて堪らない僕達の氣持に、屹度君も同感して呉れるだらう、眞實僕等は嬉しくて堪らないのだ。

——だが、然し、よく〳〵考へて見れば、今度の場合は彼の第一輯と異り、記念歌集の輕い世俗的な意義の代りに、年刊歌集として當然課せられるであらう所の嚴正なる批判の答を覺悟せねばならぬだらうし、旁々そう單純に欣んで計りは居られない氣がして、何となく、一種底氣味惡い不安に驅られる。勿論歌壇中央の動向に關りなき地方私的短歌會の綜合歌集とは言へ、それを理由に批評の冷眼を拒否し得る權利は無いのみならず、僕等としても、折角努力の結果である第二輯を、よし脅えつゝも、我から進んで斯る不名譽なる例外の淵に投棄てる勇氣もない。惟うて茲に到れば、われから生み出した此重荷を前に、

ほとほと途方に昏れる思ひがする。君、僕は僕達の第二歌集を信じる心に毛頭狂ひはないが、多難なる可き前途を憂ひ見乍ら、密に寄せる我等の希望、信念乃至はその發行の意義に就ての僕の意見を書き送らう。

君、僕は今「白珠 第一輯を前にして、あれ以後第二輯出版に至る約一年間に起つためまぐるしい程の會員の動きや、作品の上に現れた諸種の傾向や、はては三十人にも近い平安短歌會が如何なる集團的傾向を辿つたか、そして現在以後如何にその歩みを歩まむとしつゝあるか——等の問題に就て思索をめぐらしてゐる。

言ふ迄もなく、昭和五年七月圓山公園事務所に於て、その第一回例會を開催した時、他日お互の作品を世に問ふとか、その主張を堂々天下に發表するなどといふ、所謂短歌的自覺を持つてゐた譯ではなかつたし、第一、斯る烏合の集團的行動の如何に恥づべき暇つぶしであるか、といふ事すら全く考へてゐなかつたやうだ。だから各流各派の亜流が仲好く一堂に會して、自慰的社交的に漫然短歌を語る光景は寔に珍風景といふべく、從つて其間會自身の精神や立場を持たなかつた事は、蓋し當然過ぎる當然であつた。

併し、幸運な不思議がその後に顯れた——と云ふのは、自覺なき會合にも拘らず、殆んど信ずべからざる興味と正確さとを以つて、二年三年と歳月を經るにつれて、自然に——それは春が來て花が開くほどの自然さと當然さのうちに各人の心に物心がつきそめて、いつしか短歌と人生の關係や、集團的行動の社會的意義等に就て考へ深くなつてきた。そして一旦目醒めた物心は日に月に生長していつて遂に果しなき議論の擧句、めい〳〵自分だけの心を深く藏しつゝ、冷えきつた茶を啜る、白けきつた空氣に前途を悲しませたのはその頃の事であつた。

斯る會の狀勢の最中に現れたのが、かのポトナムの小泉苳三氏であつた。氏に親しく短歌を聽いて直接獲る所はなかつたとはいふものゝ、思春期の昏迷に彷徨する我々に對して、向ふ可き一定の方向を暗示し、且つ「これではいけない」と一層の奮起を促した效果は實に著しいものがあつた。

その後も、いやに神經の昂つた懷疑的な日は續いていつた。そして一度點火された燎原の火は必然的に大事の歸結に向つてのその進行を止めなかつた。

「白珠」第一輯は斯して「果しなき議論の成果」として、生れ落ちるやうに生れたのであつた。

第一輯誕生の意義は種々あるであらうけれ共、燃え燁る燎原の火を煽る旋風の役割に於て最も深く認識すべきであらう。即ち(一)會の内部機構に與へた影響、(二)その外部に對して働きかけた影響の上に特に著しいものを見るべく、且つ兩者は各相互に作用し合つて集團的自覺の助長發展に拍車をかけた事は言ふまでもない。

殊に會の外部、即ち平安倶樂部全體の上に顯れた影響こそ素晴しいものがあつた。此事は、創立以來實に六年の年月を曆してゐたに拘らず、常に極めて少數の短歌同好者間にのみ存續してゐた、換言すれば倶樂部の日蔭に隱れてゐた我々の短歌會が、之を機として俄に倶樂部の表面に浮び上り、一般倶樂部員の注意を喚起した結果、軈て會員の增加となつて現れた。之こそ實に豫期せざる收穫といふ可く、高阪盛太郎、田村六郎、井上正子、糟谷敏英君等十名の入會又は復歸を見て、その總數三十名に垂んとする、寔に發會以來未だ嘗て見なかつた陣容の盛觀を呈した。而も此等の諸君は教養豐かな青年であり、短歌愛好

心强く、漸く軌道に乘つた計りの會に一種清新の氣を吹込み新舊會員を擧げて一途短歌の險道に赴かしめる有力なる推進力となつた。從つて、作品に、論評に、研究に、幾多の示唆に富んだ業績が競うて例會を賑かにした事は怪しむに當らない。

斯くて、今、平安短歌會は我から進んで短歌求道の險阻を踏み緊めつゝ、一歩〳〵近づくであらう『魂に打顫ふ短歌』を夢想して他を顧みる暇がない。

君、僕は正直な所、歌集としての第二輯を第一輯より優れてゐるとは考へてゐない、と云つても夫は主として形式的な觀點からの話である――が。だが若しも君が此事を忘れて第二輯を鑑賞しても、徒に蕪雜と粗野とを發見するに止るだらう。素直に言へば、此度の場合に於ては中間的年刊歌集として必要な最少限度の姿體を整へるだけに止めた、極めて實質的な年次報告書に過ぎないけれ共、問題は斯る點にあるのではなく、實に、我々が頼みとする、その年刊集的意義の有無に係つてゐるのである。では果して如何なる年刊集的意義を自負してゐるといふのか――。

君、ありやうは漸く動き初めた短歌的自覺に成る粗野で挑戰的な、その上懷疑的な我武

者羅な作品を收めた、一つの安つぽい綜合歌集が「第二輯」の眞實の姿なのかも知れない。併し僕達は其事を承知の上で、尙且つ物を言はむとするのは、我々內部機構に對して有するひそかなる年次的意義を信じるが故である。卽ち第一輯が、彼の無自覺なる短歌會時代より脫して自覺的な時代に入らむとするに際し「その前夜」としての意義を持つた如く、第二輯に寄せる我等の希望は、實に第一輯出版以後急激に動き出した短歌的自覺に依つて捲起された、所謂狂亂時代に於ける苦惱の實體を記錄すると共に、首出前後の昏迷の間にあつて、微弱ながら仄見える統一的精神への動向を凝視せんとするにある。

——では結論を急がう、敢て僕は言ふ、卽ち「白珠」第二輯に於ては、第一輯の形式的靜的貴族的歌集であつたのに反して、正しくその對蹠的なる立場に於ける年刊歌集としての意義を信ずると共に、集團的自覺の第一次展開過程に於ける求眞的動向の中に、その特異性を發見すべきである——と。

皇紀二千五百九十六年十二月　千秋記

昭和十一年十二月十五日印刷
昭和十一年十二月二十日發行

非賣品

編輯兼發行者　京都市上京區新烏丸頭町一五二　河村泰敏

印刷者　京都市下京區北小路通新町西入　須磨勘兵衛

印刷所　京都市下京區西洞院通七條南入　内外出版印刷株式會社

發行所　京都市廳内　平安倶樂部短歌會

二限
百定
部版

終